

琉球大学学術リポジトリ

スピリチュアル・ペインから見たスピリチュアル・ケアについて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2012-06-27 キーワード (Ja): スピリチュアルケア, スピリチュアルペイン, スピリチュアル, 生きる力 キーワード (En): 作成者: 浜崎, 盛康, Hamasaki, Moriyasu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24796

スピリチュアル・ペインから見たスピリチュアル・ケアについて

浜 崎 盛 康

Moriyasu Hamasaki

On Spiritual Care Relating to Spiritual Pain

スピリチュアル・ケア (spiritual care) とは何か、いろいろ議論があるところであり、研究者の間でも意見が分かれている。しかし、スピリチュアル・ペインについては多くの研究者がその根本的において比較的一致した見解を持っていると思われる。そこで、これを手がかりに、「スピリチュアル」の意味を定め、それに基づいて考察することで、スピリチュアル・ケアとは何か、端的に規定できる。あらかじめ述べておけば、「スピリチュアル」とは、「自己の生と死に関する～」であり、また「生きる意味（と死の意味）に関する～」であると規定でき、そこから一言で端的に言えば、「スピリチュアルケアとは生きる力を取り戻すケアである」と言えることになる。本稿は、これらの点について論じるものである⁽¹⁾。

キーワード:スピリチュアルケア、スピリチュアルペイン、スピリチュアル、
生きる力

I スピリチュアル・ペインとその「^{ペイン}痛み」の程度

1 スピリチュアルペインとは何か

癌の末期等で死が避けられなくなった時、我々が持つ痛みは3つないし4つの面の痛みが複合したものであると言われる。世界保健機関 (World Health Organization) の緩和ケア (palliative care) の定義は、要点をまとめると次の通りである⁽²⁾。緩和ケアとは、身体的(physical)、心理社会的

(psychosocial)、およびスピリチュアル(spiritual)な痛み(pain)を、早期より誤りなく診断し治療することによって、苦痛の予防と除去をおこない、それによって、生命を脅かす病気に直面している患者とその家族のクオリティー・オブ・ライフ (quality of life) を改善するアプローチである。あるいは、アルフォンス・デーケン³⁾は、安らかな終末期を過ごすためには末期患者の抱く「総体的苦痛(total pain)」の除去ないし緩和が必要となるとし、ホスピスでは「(1) 肉体的苦痛 (physical pain)、(2) 精神的苦痛(psychological pain)、(3) 社会的苦痛 (social pain)、(4) 霊的苦痛 (spiritual pain)」の総合的なコントロールが目指されると述べている³⁾。このように、死に直面する時我々が持つ痛みは、「身体的な痛み、心理的な痛み、社会的な痛み(ないし心理社会的な痛み)、そしてスピリチュアルな痛み」が複合したものであると考えられるのである⁴⁾。

さて、本節はそれらの痛みのうちスピリチュアル・ペインに注目して考察を進めるものであるが、そのスピリチュアル・ペインとは何であるか、代表的な論者の述べるところを見てみよう。窪寺俊之は、「スピリチュアルペインとは、人生を支えていた生きる意味や目的が、死や病の接近によって脅かされて経験する、全人的苦痛である、……⁵⁾」と定義している。村田久行はスピリチュアル・ペインを「自己の存在と意味の消滅」と定義し、死を前にした末期の患者は、自己の存在の消滅を実感することによって自己の生の意味、目的、価値が揺らぐのを経験するとする⁶⁾。スピリチュアル・ペインの構造を解明するため、村田は人間存在の構造を「時間存在」、「関係存在」、「自律存在」という3つの次元において捉え、時間存在として人間は死の接近によって将来を失い、それによって現在に生きる意味をも失ってしまうとする⁷⁾。関係存在として人間は、死によって他者を失い、それによって自己の存在の意味をも失う⁸⁾。自立存在として人間は、死の接近によってさまざまな「できなくなる」を経験し、したがって他者への依存を経験し、それによって自己の生の無価値さ、無意味さを経験すると言うのであ

る⁽⁹⁾。また、村田は生きる意味について、「生きる意味はもうないということ、生きる意味が実感できない、あるいは他の人との繋がりを失う、あるいは愛されていると実感できない。これがスピリチュアルペインではないかと私は考えています。このことを別の表現で言いますと、生きることの無意味、空虚、虚無、孤立、疎外、そういう言葉で表されるかもしれません。」とも述べている⁽¹⁰⁾。

Dorothy C. H. Leyも、スピリチュアル・ペインの本質は「人が自分は無意味である、あるいは自分の人生は無意味であったと感じること」(to feel that one is meaningless or that one's life has been meaningless)であると述べている⁽¹¹⁾。

以上のようにスピリチュアル・ペインについて見てみると、スピリチュアル・ペインは、その根本において「自己の生と死、その意味に関する痛み」としてとらえられている言えるが、ここで、もう少しその意味を明確にしておきたい。というのは、スピリチュアルペインとして挙げられるもののなかに、「死への恐怖」、「自己の存在が消滅してしまう恐れ」もあるからである⁽¹²⁾。つまり、多くの論者においては生きる「意味」や「目的」の問題としてスピリチュアルペインが挙げられていると同時に、これとあまり明確には区別されない表現で「死そのものへの恐怖」が挙げられているからである。

がんの告知を受ける等によって大きなショックを受けるとき、そこには「死の恐怖」が含まれていることがある。『スピリチュアルケア』（死の臨床10）⁽¹³⁾には、次のような事例報告がある。癌の再発でホスピスに入院した16歳の少女が、担当医より再発の告知を受けて、「再発ですか？ 怖い、怖い。私これからどうなるの？」と体を震わせながら慟哭し、その後も「私、死ぬんですか？嘘でもいいから死なないと言ってください」等、「泣きながら、病状進行への恐怖と不安な思いを度々訴えた。」この少女の訴えは、同報告で「死の恐怖をストレートに表現するというスピリチュアルペイ

ン」ととらえられ、ホスピスケアチームの対応のあり方について議論が行われている。この例のような直接的な死（生の消滅）の恐怖は、生きる意味の喪失についてのものではないだろう。つまり、このような死の恐怖は、生きる意味が失われることによるものではなく、いわば理屈抜きで「ストレートに」我々を襲うものであろう。

したがって、スピリチュアルペインはこの点も考慮して言えば、「生きる意味や存在する意味の喪失、揺らぎ等」による意味に関わるものと、直接的な「死の恐怖、自己の生（存在）の消滅の恐怖」による（意味には直接は関わらない）ものがあると言えるのである⁽¹⁴⁾。

以上の考察に基づいて整理すると、スピリチュアル・ペインは、その主要な意味として、(a)自己の死（生の消滅）に対する痛み（恐怖）であり、(b)近づく死を前にして生きる（存在する）ことに対する痛み（つまり、生きる意味が揺らぎ、崩壊し、失われるといったことによって生じる苦痛）であり、(c)死の意味（死後の存続等）が分からないということによる痛みであると言えることになる。

2 「スピリチュアルペイン」の程度（強弱）

そのように規定できるスピリチュアルペインについて、その「痛み」に注目してみたい。一般的に「痛み」には、どの程度「強い」あるいは「弱い」「痛み」かという「程度」がある。したがって、スピリチュアルペインにも、どの程度強いあるいは弱い「痛み」であるかという「程度」があることになる。この点は混乱を避け精確な理解を得るために重要であるにもかかわらず、あまり指摘が行われていないように思われる。

スピリチュアルな「痛み」にも、その程度に応じて非常に強い強烈的な「痛み」からごく軽い「痛み」（この場合には「痛み」というほどではないような場合も含めて）まであり得る。たとえば、「何のために生きているのか」という問いは、しばしばスピリチュアルペインの表出の例として挙げら

れるが、この問いは必ずしも深刻な悩み（強烈な「痛み^{ペイン}」）として表出されるわけではなく、いわば純粹な探究のレベルで発せられ、純粹に「問い」として探究されることもあるだろう。このような場合この問いは、実際のところ、「生きる意味」に関わるという点でスピリチュアルであるが（次節Ⅱの1を参照）、「痛み^{ペイン}」というほどのものではなく、「痛み^{ペイン}」と言うよりはむしろスピリチュアルな「問い」あるいは「問題」とでも言う方が適切であろう。他方、もちろん、この問いを癌の末期の患者が発するのであれば、多くの場合この問いは「痛み^{ペイン}」の表出であり（念のため言えば、この場合であっても、可能性としては、「痛み^{ペイン}」ではなく純粹な問いであることもあり得る）、しかも強い「痛み^{ペイン}」、強烈な「痛み^{ペイン}」であり得る。このような場合は、「単なる精神的な痛みを越えた“魂の叫び”、自己存在の意味や価値に関わるより深いレベルの痛み」と適切に表現できる⁽¹⁵⁾。しかし、スピリチュアルペインとしての「人生の意味への問い」という表現は、誤解を招く恐れがあるとも言えよう⁽¹⁶⁾。というのは、今見たように、「人生の意味への問い」はスピリチュアルであるが、「痛み^{ペイン}」というほどではないことがあるからである。「人生の意味への問い」が、すべてスピリチュアルペインであるということではないのである。

では、スピリチュアルペインの「強い」あるいは「弱い」は、何に関係しているのだろうか。それは、スピリチュアルな否定的衝撃の強弱とスピリチュアルな悩みの深刻さによると言える。つまり、たとえば先に見た16歳の少女の「再発ですか？ 怖い、怖い。」「私、死ぬんですか？」と「死の恐怖をストレートに表現するというスピリチュアルペイン」は、死つまり自己の存在の消滅というスピリチュアルな事態が強烈な否定的な衝撃として、少女を襲ったと言える。これに対して、仮に死を受け止める覚悟ができていような場合には、告知を受けてもそのスピリチュアルな否定的な衝撃は「痛み^{ペイン}」としては比較的軽いものであることもあるだろう。

このようにスピリチュアルペインに、その強弱の程度を認めることで、た

たとえば「人生の意味への問い」がスピリチュアルペインであるとされるとき、不明瞭さを取り払うことができる。

Ⅱ 「スピリチュアル」とは何かー「スピリチュアル」の3つの意味ー

1 「スピリチュアル」とは何か

「スピリチュアル」とは何かについても議論の多いところであるが、スピリチュアルペインに基づく以上の考察から、「スピリチュアル」についてどのような規定を得ることができるだろうか。Iで今検討したように、スピリチュアルペインは、その主要な意味として、(a) 自己の死（生の消滅）に対する痛み（恐怖）であり、(b) 近づく死を前にして生きる（存在する）ことに対する痛み（つまり、生きる意味が揺らぎ、崩壊し、失われるといったことによって生じる苦痛）であり、(c) 死の意味（死後の存続等）が分からないということによる痛みであると規定できる。したがって、この規定から「痛み」に関連する部分を取り除くことで、「スピリチュアル」とは何か、その意味を定めることができることになる。すなわち、「スピリチュアル」とは「(a) 自己の死（生の消滅）に関する～」であり、「(b) 死を前にした生きる意味に関する～」であり、そして「(c) 死の意味に関する～」である。

このそれぞれについて、論点を見やすくするためにパラフレーズしておこう。「(a) 自己の死（生の消滅）に関する～」は自己の死と生の消滅に関するものであるが、生の消滅が痛みであるから、この(a)のスピリチュアルには逆の「生の存続」が含意されているだろう。したがって、これは「(a) 自己の生と死に関する～」とパラフレーズしておきたい。「(b) 死を前にした生きる意味に関する～」は、生きる意味が揺らぎ、崩壊し、失われるといったことによって生じる痛みは死を前にした患者に特有のものではないわけであるから、「死を前にした」は取り除くことができる。そこで、これは「(b) 生きる意味に関する～」とすることができる。「(c) 死の意味に関する～」は、本

稿では十分な検討はできないが、意味に関する問題ということで、(b)に含めて考えておきたい。したがって、「スピリチュアル」とは、「(a) 自己の生と死に関する～」であり、また「(b) 生きる意味（と死の意味）に関する～」ということである⁽¹⁷⁾。これらが「脅かされ、揺らぎ、崩壊し、失われる」といったことによって「痛み^{ペイン}」が生じるわけである。

さて、しかし、「スピリチュアル」がそのような意味であれば、「スピリチュアル」は自己の生（存在）の危機（つまり死）と生きる意味の「危機」による「痛み^{ペイン}」のみに関係するのではなく、自己の生（存在）と生きる意味の（スピリチュアルな）「安寧（well-being）」に関わるものでもあろう⁽¹⁸⁾。その意味では、「スピリチュアル」は、「自己の生（存在）の肯定、生きる意味の肯定に関する～」と規定することもできるだろう。さらには、「スピリチュアル」は「痛み^{ペイン}」とは反対に「喜び」にも関係するだろう。「スピリチュアルな喜び」というものがある。つまり、それは、自分が生きていることの喜びであり、自分が存在していることの喜びである。これも、「スピリチュアル」が今規定したように「自己の生（存在）と死（消滅）に関連し、また生きることと死ぬことの意味とに関する～」ということである以上、スピリチュアルであると言えるのである。

そして、このスピリチュアルな「喜び」の場合も、どの程度大きなあるいは小さな喜びかという「程度」がある。既にスピリチュアル「痛み^{ペイン}」について、「痛み^{ペイン}」には程度があるということを見たが、このスピリチュアルな「喜び」の場合も同様のことが言えるのである。あるスピリチュアルな喜びが、強い、大きなスピリチュアルな「喜び」であることもあるし、ごく小さなスピリチュアルな「喜び」であることもあり得る（この場合、喜びというほどのものでもないことも理屈上あるだろう）。

2 「スピリチュアル」の3つの意味

そこで、そのように規定することができる「スピリチュアル」について、様々

な議論を検討してみると、「スピリチュアル」は次の3つの意味に分けて整理することができるように思われる⁽¹⁹⁾。

① 個人的で靈的、超自然的な意味での「スピリチュアル」

たとえば、沖縄のユタは多くこの意味でスピリチュアルであり⁽²⁰⁾、あるいは、島蘭進の「新靈性運動」で言及されている様々な動き（氣功、輪廻転生、臨死体験、アニミズム、シャーマニズム等）の多くはこの意味における「スピリチュアル」であろう⁽²¹⁾。

② 宗教的（組織的で靈的、超自然的）な意味での「スピリチュアル」

たとえば、キリスト教や仏教といった、宗教における「スピリチュアル」。

①と②の違いは、宗教とは何かということが関わることになる。宗教とは何かについても多くの議論があるが、しかしここでは、割合広く見られるであろう次のような考え方をいわば作業仮説として取りたい⁽²²⁾。宗教は「組織、教義、礼典、教祖等」を持つが（念のため、これも靈的で「スピリチュアル」）、①の意味の「スピリチュアル」では、そのようなものを持たず、靈的ではあるが個人的で、主観的である⁽²³⁾。

③ ①と②以外の意味での非宗教的、非靈的な「スピリチュアル」。言い換えれば、「超自然的」に対する意味での「自然的」な「スピリチュアル」。この意味での通常の人間関係等における「スピリチュアル」。

たとえば、家族の深い絆や愛、患者の生きる意味の肯定、存在の肯定に触れるような人間的な看護、あるいは人間同士の深い真実の愛等は、生きる意味、存在の肯定に関係するものとして「スピリチュアル」である。

以上の「スピリチュアル」の3つの意味は、次のように捉え直すこともできる。つまり、「スピリチュアル」についての議論においては、我々の世界全体はまず、「自然的」（③）な世界と「超自然的」な世界に分けることができ、谷山が言うようにこのどちらも「スピリチュアル」であり得る⁽²⁴⁾。そして、さらに「超自然的」な世界を2つに分けて、靈的な組織化された「宗教」（②）（いわゆる世界宗教や民俗宗教）の世界と、靈的ではあるが組織化

されていない個人的な信仰（①）（いわゆる民間信仰）の世界である⁽²⁵⁾。この両者も、もちろん「スピリチュアル」である。そのようにして、①、②、③を、いわば導出することもできる。

この①～③のそれぞれに、スピリチュアルペインがあり（もちろんスピリチュアルな喜びも同様にある）スピリチュアルケアが必要となる場合がある。

Ⅲ スピリチュアル・ケアとは何か

1 スピリチュアル・ケアとは何か

では、以上の考察に基づいて、スピリチュアルケアとは何か、規定してみたい⁽²⁶⁾。「スピリチュアル」がⅡで規定したように「自己の生（存在）と死（消滅）に関連し、また生きることと死ぬことの意味とに関する～」ということであるから、スピリチュアルケアは、この「スピリチュアル」に「ケア」を付け加えれば良いことになる。つまり、スピリチュアルケアとは、形式的には、「自己の生（存在）と死（消滅）に関するケアであり、生きること（と死ぬこと）の意味に関するケア」であると言えることになる。しかし、「自己の生（存在）と死（消滅）に関するケア」とはどういうことであり、「生きること（と死ぬこと）の意味に関するケア」とはどういうことであろうか。

「生きること（と死ぬこと）の意味に関するケア」から検討してみよう。この点については、窪寺が「スピリチュアルケアの中心的問題は、患者の生きる意味や目的への援助である。この点については、多くの研究者が一致している。⁽²⁷⁾」と述べているように、あまり問題はないだろう。Ⅰで見たように、スピリチュアルペインの本質は「生きる意味の喪失」である。スピリチュアルケアは、この「生きる意味の喪失」に対処するものである。つまり、このケアは喪失した「生きる意味を取り戻すことを援助するケア」であることになる。

では、「自己の生（存在）と死（消滅）に関するケア」はどうであろう

か。これは、「死の恐怖、自己の生（存在）の消滅の恐怖」の問題であった。したがって、このケアは、「死の恐怖、自己の生（存在）の消滅の恐怖」に対するケアである⁽²⁸⁾。つまり、このケアは、死の恐怖を受け止め、死を受容し、死が訪れるまで十分によく「生きることを援助するケア」であることになる。

「生きる意味を取り戻すことを援助するケア」と「生きることを援助するケア」は、根元的には何をすればよいのだろうか。それは、この両方のケアを成り立たせるケアとして「生きる力、生きようとする力」を取り戻し活性化するケアであろう。「生きる力」を取り戻し活性化することによって「生きる意味」を取り戻そうとする気力が湧くことになるであろうし、また死の恐怖を受け止め、死を受け入れて、「生きること」ができるであろう。したがって、一言で言えば、「スピリチュアルケアとは、生きる力を取り戻すケアである。」と言える。

2 スピリチュアル・ケアの3つのタイプ

スピリチュアルケアは一言で言えば、以上のように規定できるだろうが、スピリチュアルケアも、既に見た「スピリチュアル」の3つのタイプに応じて、3つのタイプに分けることができる。最後に簡単に確認しておきたい。

① 個人的で霊的、超自然的な意味でのスピリチュアルケア。

たとえば、沖縄のユタによる霊的な意味での問題の解決－ヌジファ等⁽²⁹⁾－はこのタイプのスピリチュアルケアである。

② 宗教的な意味でのスピリチュアルケア。

たとえば、キリスト教や仏教における神や仏を信じることによる霊的な救い等はこのタイプのスピリチュアルケアである。

③ 非宗教的、非霊的で自然的なスピリチュアルケア。言い換えれば、そのような意味での通常の人間関係等におけるスピリチュアルケア。

たとえば、生きる意味を取り戻す家族の愛・絆等によるケアや、人間的な

看護のケア－患者の生きる意味の肯定、存在の肯定に触れるような人間的な看護のケア－、あるいは人間同士の深い真実の愛によるケア等はこのタイプのスピリチュアルケアである。

終わりに

本稿は、様々な形で議論されているスピリチュアル・ケアについて、スピリチュアル・ペインの考察を基に、できる限り端的な規定を与えることを目指した。というのは、スピリチュアルケアとは何か結局の所どうもよく分からないという声をしばしば耳にするからである。そのような現状を考えると、要点を押さえてできる限り端的に規定することも、一つの試みとして意味があるのではないかということである。繰り返せば、スピリチュアル・ペインを基に端的に言えば、「スピリチュアルケアとは、生きる力を取り戻すケアである。⁽³⁰⁾」

しかし、本稿の考察は、一つの大きな課題を残したままである。つまり、本稿はスピリチュアリティ（spirituality）については意識的に全く触れていない。触れずに、スピリチュアルケアとは何か、その端的な規定に到達した。しかし、スピリチュアルケアを十分に論じるのであれば、スピリチュアリティについても十分な考察が必要である。おおよその所で言えば、スピリチュアリティとは、「あるスピリチュアルな傾向性を帯びた感性と生きる力」と捉えられることができるのではないかと思われる。本稿の考察はそのようなスピリチュアリティの把握を念頭に置いて行った。スピリチュアリティに全く触れていないが、背後には絶えずそのようなスピリチュアリティの把握があった。スピリチュアリティは極めて重要であり、稿を改めて考察したい。

注

(1) 本稿は「スピリチュアルケアとは何か」論じるものであるが、拙稿「スピリチュアリティと宗教、および生きる意味について」（「人間科学」琉球大学人間科学科紀要、第22号、2008年9月pp.1-21）から本稿と関連する箇所を一部要約するかたちで再掲している。

(2) <http://www.who.int/cancer/palliative/definition/en>

(3) A.デーケン、飯塚眞之編、『日本のホスピスと終末期医療』、春秋社、1999年第10刷（1991年第1刷）、p.148。ウォルデマール・キッペスも、「多くの患者の苦痛は身体的な問題に限られているわけではなく、痛みの治療はいくつもの苦しい症状の一つに対する治療であり、身体的、心理的、社会的、霊的な（SPIRITUAL）面のすべてに対応する包括的な医療の一部を構成しているにすぎないと考えるべきである。この包括的な医療はパリアティブ・ケア（緩和的医療）という名で知られるようになってきた。」と述べている（ウォルデマール・キッペス、『スピリチュアルケア』、サンパウロ、1999年、p.2）。なお、このように末期の患者の持つ痛みの中に、「スピリチュアル・ペイン」を位置づけ、それに対するスピリチュアル・ケアの重要性を力説したのは、現代のホスピスの創始者であるシシリー・ソンドースであり（シャーリー・ドゥブレイ、『シシリー・ソンドース』、若林一美他訳、日本看護協会出版会、2004年（1st.1989年）、pp.234-235）、そのことは彼女の創始したセント・クリストファー・ホスピスのインターネット上のホームページにおいても確認できる(<http://www.stchristophers.org.uk/>)。

(4) スピリチュアルペインについては本文で詳しく考察する。他の3つについてごく簡単に説明しておけば、身体的苦痛とはたとえば癌による身体の激しい痛み等、心理的苦痛とは死を前にしての不安やいらだち、鬱状態等、社会的苦痛とは家族への負担、経済的な問題等によるものを言う。

(5) 窪寺俊之『スピリチュアルケア学序説』、三輪書店、2004年、p.43。

(6) 村田久行「終末期がん患者のスピリチュアルペインとそのケア」、
「緩和医療学」Vol.5 no.2 2003年、p.62(158)-p.64(160)、および「スピリチュ
アルペインをキャッチする」、「ターミナルケア」、Vol.12, No.5, 2002,
p.422。

(7) ibid.

(8) ibid.

(9) ibid.

(10) 村田久行「スピリチュアルペインの定義」、『心と魂の叫びに応
えて』、臨床パストラルケア教育研修センター編、サンパウロ、2001年、
p.87。

(11) Dorothy C.H.Ley, "Spiritual Care in Hospice", in *Death and S
pirituality*, p.175.

(12) たとえば、淀川キリスト教病院ホスピス編『緩和ケアマニュアル』
第5版、最新医学社、2007年、p.39、pp.205-206。

(13) 『スピリチュアルケア』（死の臨床10）、日本死の臨床研究会編、
人間と歴史社、pp.90-95)

(14) ここにはさらに「死の意味」の問題も関係していると考えられる
が、この点については他日を期したい。

(15) 淀川キリスト教病院ホスピス編『緩和ケアマニュアル』、p.205。

(16) ibid. p.39。あるいは、同様に「価値体系の変化」も必ずしも
「痛み^{ペイン}」となるとは限らず—というのは良い方への「価値体系の変化」も当
然ありうるからである—、そのままでは混乱を招くことにもなりかねない。
いちいち挙げないが同様の混乱が、しばしば見られるように思われる。

(17) 最終的には「自己の」も取る方がよいだろう。「他者」の生と死も
我々にとって、スピリチュアルなものになりうるからである。

(18) いわゆるSpiritual well-being. Cf. Elizabeth Johnston Taylor,
Spiritual Care: Nursing Theory, Research and Practice, Prentice Hall,

2002, p.7 (邦訳『スピリチュアルケア』エリザベス・ジョンストン・テイラー、江本愛子・江本新監訳、医学書院、p.7参照)。

(19) 前出の拙稿「スピリチュアリティと宗教、および生きる意味について」および浜崎盛康編著『ユタとスピリチュアルケア』、ボーダーインク、pp.184-192参照。なお、①と②の全体をまとめて(区別せずに)指す意味で、「スピリチュアル」という語は用いられることがあり、また、①②③全部をまとめて(区別せずに)指す意味で「スピリチュアル」という語は用いられることもある。これらを考慮すれば、「スピリチュアル」の意味は5つであるとも言える。

(20) ユタについては、ひとまず、浜崎盛康編著『ユタとスピリチュアルケア』を参照。

(21) 島蘭進(『精神世界のゆくえ-宗教・近代・^{スピリチュアリティ}霊性』岩波書店)の言う精神世界における「自己変容」は、自己の存在のあり方の変容である限り、自己の存在の意味の変容(たとえば、ちっぽけでつまらない存在だと思っていた自分が、宇宙の大きな存在とつながって、覚醒し変容する、というように)であり、自己の存在の意味の肯定、生きることの肯定につながるものとして「スピリチュアル」である。

(22) 岸本秀夫『宗教学』平成5年37刷り(昭和36年印刷)、pp.12-18

(23) 窪寺俊之『スピリチュアルケア学序説』p.23、John D. Morgan, “The Existential Quest for Meaning”, in *Death and Spirituality*, p.175. 他

(24) つまり、究極的にはありとあらゆるものすべてがスピリチュアルであり得る。谷山洋三「スピリチュアルケアの構造」、窪寺俊之・平林孝裕編『続スピリチュアルケアを語る』関西学院大学出版会2009年、p.77

(25) 世界宗教、民俗宗教、民間信仰については、浜崎盛康編著『ユタとスピリチュアルケア』p.17-18を参照。

(26) スピリチュアルケアの定義は多くの研究者が行っている。窪寺『スピリチュアルケア学概説』、pp.57-58や、Elizabeth Johnston Taylor, *op.cit.*

pp.24-28（邦訳『スピリチュアルケア』エリザベス・ジョンストン・テイラー、江本愛子・江本新監訳、医学書院、pp.23-27等参照。

（27）窪寺俊之『スピリチュアルケア学序説』、p.64。

（28）浜崎盛康『死と哲学の知』ナカニシヤ出版、2000年参照。

（29）浜崎盛康編著『ユタとスピリチュアルケア』、pp.84-85、pp.152-161参照。

（30）スピリチュアル・ケアについての本稿のこの規定は、スピリチュアルペインを基にしたものであり、さらに「自己変容」（注（21）参照）を考慮に入れた場合、もう少し違う表現になるだろう。この点については、稿を改めたい。